

学会報告

日本スポーツ産業学会第18回大会実施報告¹⁾

鷲崎早雄（大会実行委員長）

1. はじめに

日本スポーツ産業学会第18回大会は2009年7月11日(土)にアクティシティ浜松コンgresセンター（浜松市）にて、12日(日)に静岡産業大学磐田キャンパス（磐田市）において開催されました。

昨年の札幌における大会に引き続き2年続きの地方開催でしたが、静岡県では初めてのスポーツ産業系の大会ということもあり、一般参加者も含め盛況で熱気ある大会となったのではないかと考えております。

開催にあたりましては、前回と同様に経済産業省、文部科学省、(財)スポーツ産業団体連合会、(財)日本フィットネス産業協会にご後援をいただきました。また、開催地の地元として、大学ネットワーク静岡・科学交流フォーラム、静岡産業大学、静岡県が共催し、浜松市、磐田市、浜松商工会議所、磐田商工会議所の後援をいただくという形をとることができました。

また、ミズノ株式会社、株式会社アシックス、笹川スポーツ財団、ヤマハ発動機株式会社、株式会社ヤマハフットボールクラブ、株式会社エスパルス、株式会社フェニックスに協賛していただきました。その他地元企業の皆様に運営支援を協賛していただきました。ご支援を賜りました多くの方々に、厚くお礼を申し上げます。

大会の運営にあたりましては、大会運営委員、大会実行委員、学会事務局、静岡産業大学経営学部事務局、静岡産業大学経営学部の学生の皆様に大変なご尽力をいただきました。重ねて深く感謝申し上げます。

2. 大会テーマ

大会全体のシンポジウム、基調講演のテーマは「スポーツ産業のグローバル化と地域の可能性」としました。スポーツ産業は、人によって定義の違いはありますが、だいたいの所では3つの産業分野に分けられると考えられています。1つはスポーツ用品産業、2番目がスポーツイベント産業、3番目がスポーツ施設産業であります。スポーツ用品産業は製造業、スポーツイベント産業は情報サービス産業、スポーツ施設産業はインフラを提供する装置産業の業態であると考えればわかりやすいと思います。

スポーツ用品産業はもとより、スポーツイベント産業においても、経営環境がグローバル化しているということは避けがたいことです。オリンピックや国際大会の場合、日本製の用具、シューズ、ウェアなどが活躍をしていることを我々はしばしば目にします。スポーツイベントでは開催権や放映権を巡って激しい国際競争が繰り広げられていることを目の当たりにします。最近の水泳における水着問題では、製品が良いだけでなく、水着自体の公認を得る競争があることが明らかになりました。そうした新しい国際競争に遭遇しながら勝ち残っていかなければならない、ということがスポーツ産業に与えられた今日的な課題であろうと思います。

また、地域の可能性という点では、そうしたグローバル化に成功するためには、一方で地域の役割が大きいということをあげています。国際標準の体系の中でそれぞれの地域が持つ特性を発揮した役割をしっかりとやるということ、そのような産業の基盤があるのかということが問われるものと思います。

例えばサッカーでは各地域のクラブ経営というものが基礎になって日本代表チームが選

¹⁾ 本報告は、「スポーツ産業学研究」日本スポーツ産業学会、第19巻第2号（2009年9月）、静岡総合研究機構情報誌「SR」に掲載した報告を再編集したものである。

出されるわけです。そのようなグローバル化からのニーズだけでなく、地域における産業の活性化やコミュニティ形成の観点からも、地域におけるスポーツ産業の創造が期待されていますが、それは今後どういうことになるのか、どういう可能性があるのかという点にも検討を加える必要があろうかと考えます。

そういう意味で今回のテーマは、スポーツ産業の現状と将来におけるグローバルとローカルのインターロッキングというものを、静岡県の場合を取り上げながら考える機会にしようという意図でありました。大会における2本の基調講演や委託事業における3本のシンポジウムを通じて、この問題にいろいろな視点から議論が加えられていったことに一定の満足感を感じています。詳しくは後ほど学会から刊行される大会記録を見ていただければと思います。

3. 大会プログラム

【第1日 7月11日(土)】

- 9:30-10:00 開会式
- 10:05-11:00 基調講演Ⅰ
- 11:05-12:00 基調講演Ⅱ
- 12:00-13:00 昼食/理事会
- 13:00-13:30 学会総会
- 13:40-16:10 シンポジウムⅠ
- 16:20-17:50 シンポジウムⅡ
- 17:50-18:20 学会会長講演
- 18:35-20:00 懇親会

【第2日 7月12日(日)】

- 9:00-10:15 一般研究発表(2会場)
- 10:30-10:40 歓迎挨拶
- 10:40-12:10 シンポジウムⅢ
- 13:00-17:00 一般研究発表(2会場)

【第2日 並行プログラム】

- 13:00-14:30 企業フォーラム
- 14:40-17:00 企業相談会
- 15:40-17:30 市内スポーツ施設見学

4. 大会の概要

(1) 基調講演

基調講演は以下の2題でした。大会テーマ

に沿って、基調講演Ⅰでは「スポーツのグローバル化」を展望していただくことを意図しました。平田氏はご自身のサッカー協会での経験も交えて、グローバル化の実例とその現場におけるスポーツ外交の重要性、それができる人材育成の重要性、また今後のグローバル化における東アジアの重要性など広範囲に俯瞰していただきました。また基調講演Ⅱでは「地方の可能性」を実践経験を踏まえてお話していただくことを意図しました。小田氏の場合、プレーヤーズの堺地域での可能性の実践は、「企業スポーツの生き残り」の問題に直接リンクしている問題でありました。その両者の問題(企業スポーツの生き残り地域クラブとしての成功)を解くヒントがこの実践例にあるのではないかとということがわかりました。内容は今後まとめられる学会大会記録に譲ります。

【基調講演Ⅰ】スポーツ産業のグローバル化：平田武男氏(日本スポーツ産業学会理事、早稲田大学教授)

【基調講演Ⅱ】新しい企業スポーツ像を目指した歩み～地域共生型チームを目指して：小田勝美氏(株式会社ブレイヤーズスポーツクラブ常務取締役事業部長)

(2) 学会会長講演

学会会長の特別講演と言う形で会長にテーマを自由に選んでいただき講演をしていただきました。WBCの成功の分析をしつつ将来のプロスポーツの課題を述べられ大変印象深い内容でした。

【会長講演】スポーツビジネスの成功と課題-WBCと日本プロ野球を中心に：滝鼻卓雄氏(日本スポーツ産業学会会長、株式会社読売巨人軍オーナー)

(3) シンポジウム

シンポジウムは大会初日に2本、2日目に1本の計3本が行なわれました。

【シンポジウム1】ではスポーツ産業のグローバル化の視点から、日中韓の東アジアにおけるプロスポーツマーケットが議論されました。中国の経済成長により、東アジアのス

スポーツマーケットはグローバル・マーケティングの観点から注目されています。例えばサッカーでは、A3 Champions Cupが今年(2009)で7回目の大会を迎えるなど、東アジアのプロスポーツリーグの統合に向けての動きも活発になっています。しかし、日中韓のスポーツマーケットは物理的な距離よりも大きな違いを見せており、それは文化、社会制度、スポーツの底辺、企業やメディア環境の違いなど多岐にわたって発見されることが出来ます。今回のシンポジウムでは、マーケットの違いや類似点を日中韓のマーケティングの専門家や研究者に議論していただき、今後の目標や課題を明らかにすることができました。

コーディネーター：原田宗彦氏（日本スポーツ産業学会理事、早稲田大学教授）

パネリスト：

- Feng Lu氏（中国CFA有限公司社長）
- Shoto Shu氏（中国OCEANSMarketing社長）
- Chong Kim氏（韓国漢陽大学教授）
- 通訳：倉 峰氏・元 晶煜氏（静岡産業大学）

【シンポジウム2】ではスポーツ産業の地域における可能性の視点から、静岡県のケースを中心に産業創造の問題を議論していただくことを意図しました。静岡県はスポーツ王国と言われているように、戦後すぐの古橋広之進さんのスポーツ王国に始まり、陸上、水泳、サッカー、野球、バスケットなどのメジャーなスポーツが盛んです。また、モータースポーツ、マリンスポーツ、ゴルフなどのレジャースポーツも大変盛んな地域です。また健康、体力づくりや生き甲斐につながる生涯スポーツの振興にも積極的に取り組んでいます。これらを基盤としながら静岡県では色々なスポーツ産業誕生の芽生えが見られます。それらをケースとして取り上げ、他県（大阪府堺市）の状況を交えながら、スポーツ産業創造の取り組み方法について議論を展開することができました。

コーディネーター：大坪 檀氏（静岡産業大学学長）

パネリスト：

- 花森憲一氏（静岡県副知事）
- 山口 建氏（静岡県立静岡がんセンター総長）
- 川村 修氏（株式会社シャンソン化粧品代表取締役社長）
- 小田勝美氏（株式会社ブレイザーズスポーツクラブ常務取締役事業部長）

【シンポジウム3】では静岡県のプロスポーツ3チームの社長によるプロスポーツ経営の現実について、現場の課題と解決方向、およびプロスポーツ経営を取り巻く経営環境の変化について方向性を探ることを意図しました。静岡県はかつて「サッカー王国」として全国高校選手権大会で多くの優勝校を輩出し、現在でも日本サッカー協会（JFA）への登録数も全国4位、現役Jリーガー数全国1位を誇っています。しかし最近では数的には誇れますが、実績が低迷しているということで「王者復活」が県内関係者の合い言葉になっています。このシンポジウムではジュビロ、エスパルスの社長と、プロバスケット浜松フェニックスの社長をお招きして、今後プロスポーツを活性化するためには何をすべきであるのかを目的として議論をすることができました。

コーディネーター：松崎孝紀氏（静岡産業大学客員教授）

- 吉野博行氏（株式会社ヤマハフットボールクラブ代表取締役社長）
- 早川 敏氏（株式会社エスパルス代表取締役社長）
- 久野将稔氏（株式会社フェニックス代表取締役社長）

(4) 一般研究発表

一般研究発表は36件と昨年より少なめでした。本年からはスポーツ経営系の発表の機会

が増えていることも減少の理由としてあるようです。発表内容では、傾向として観戦者に関する研究発表が多いという特徴は今年もそうであったようですが、内容は多岐にわたり活発な議論が行なわれていました。

(5) 企業フォーラム

スポーツ産業の発展のためには、それを支える人材の育成が重要です。スポーツ産業学会の大会では、毎年スポーツ企業フォーラムあるいはスポーツキャリア・フォーラムを行なって、主として参加学生・大学院生を対象に、スポーツ関連企業で求められる人間像という観点でいろいろお話をいただくプログラムを用意しています。本年は静岡県で開催されましたので、県内・近隣大学の学生・院生にとって、日頃はあまり接することができない大手スポーツ企業の人事・総務担当者から直接話を聞くことができる良い機会となりました。近年、スポーツ経営やスポーツ産業という分野を専攻する学生が増えてきています。これらの学生の大半は、自分自身がアスリートだからスポーツを専攻するという発想ではなく、スポーツが大好きだから自分自身の身を置く場としてスポーツ関連の環境を選び、その環境の中で色々な職種を経験したいという発想であります。

今回のフォーラムでは、世界のスポーツシーンをリードするメーカー3社に、ゴルフ場運営事業を全国展開する情報サービス型企業、また世界的なピアノメーカーでありながら、関連事業として体育教室の普及に力を注ぐ企業が加わり、それぞれの企業が理想とする人材像が示されました。また、フォーラムが終了した後にさらに質問がある学生を対象として、企業相談会を設けました。フォーラムの参加学生数は138名でした。企業相談会では熱心な学生が多く、最後の学生が相談を終えた時には17時を回っていました。

コーディネーター：平 光正氏（静岡産業大学）
パネリスト：

増田桂子氏（株式会社アシックス人事総務部主査）

高田泰史氏（プーマジャパン株式会社人事・総務部長）

水野利昭氏（ミズノ株式会社社長室室長）

谷内智成氏（ミズノ株式会社東京人事総務課主事）

飯塚益次郎氏（株式会社アコーディア・ゴルフ総務人事部人事顧問）

多田立美氏（株式会社河合楽器製作所体育事業部研究室室長）

(6) 市内スポーツ施設見学

磐田市内には、以下に示すようなユニークなスポーツ施設がありますので、他地域から来られたスポーツ産業学会の方々に、磐田市内見学を兼ねて案内する企画を立てました。特に浜松ホトニクススポーツ研究所では、これまで培われた光技術をベースとして、スポーツの運動機能や生理機能を計測する技術の研究開発成果を見ることができました。参加者からは新しいスポーツ・健康産業の萌芽を見ることができたと好評でした。参加者は海外からのシンポジウム参加者を含め25名でした。

【見学施設】

- －ヤマハスタジアム
- －浜松ホトニクススポーツ研究所
- －ヤマハ発動機大久保グランド
- －総合グランドゆめりあ

5. おわりにかえて

スポーツ産業を論じる学問的な支えはスポーツ経営学です。スポーツ経営学は1970年代に北米の大学（主としてビジネススクール）で研究が始まりました。スポーツを経営学、経済学、社会学、法学などの社会科学の分野から研究し、それぞれの分野での特性を明確にする努力をしながら、スポーツマーケットや企業活動で起こってくる諸問題への指針を与えていくことを目的としています。学際的であり、また実学的な学問であると考えます。

2日間の議論を通して見えたことは、スポーツ産業の創造に必要なことは、地域がスポーツを21世紀の次なる重要な産業（基幹産業）として認識し、育成していくということです。

そのように考えて居る人が多数居ることがわかりました。静岡産業大学の大坪檀学長によれば、その場合の地域には5つのことが必要であると考えられます。1つは地域社会の構成員の強い意志の存在であります。2つ目はそれを推進するための行政上の基本的な推進構想の存在です。3つ目は企業や地域社会のサポート、4つ目は大学など教育研究機関の参画、5つ目はスポーツを愛好する風土の存在であります。またスポーツ産業のグローバル化では、マーケットでの国際競争が重要であるとともに、マーケットを理解する上での文化や社会環境の違いを認識できる国際理解力や、さらに国際的なスポーツ外交の必要性、そうしたことができる人材育成の重要性までが見えてきているのではないかということがわかりました。

我々は、このシンポジウムの議論で見えてきたことを一過性の議論で終わらせるのではなく、さらに緻密で丁寧な作業を行ないながら分析し、研究活動を県内の大学や研究機関に定着させることが何より必要なことであると考えます。この委託事業を契機に、今後、一層議論が展開されることを期待します。

大会運営面では、静岡県で初めての大会であること、これまでの地方開催と違い、県庁所在地以外での開催であること、初日と2日目の開催が別会場になったことなどから、参加者がどのくらい集まるのかが最後まで心配の種でした。結果は以下のとおりでした。

【初日】

一般市民・学生（シンポジウムのみ） 78名
来賓・関係者・報道 29名
計 107名

【2日目】

一般市民（シンポジウムのみ） 69名
学生（企業フォーラムなど） 180名
来賓・関係者・報道 16名
計 265名

【初日と2日目】

学会事務受付有料入場者数 181名
計 553名

2日間で553名の入場者は率直に言って私ども実行委員の予想を超えた数であり、たい

へん嬉しく感じました。報道機関も初日9社、2日目3社が取材に訪れ、いずれも地方版ではありますが、テレビ報道、新聞報道も数多くなされました。

シンポジウムと企業フォーラムは静岡県の学術支援プログラムである大学ネットワーク静岡の委託事業として助成金を得て実施致しました。本大会の予算は学会員の参加費と広告など協賛金の範囲内で独立採算で行なうということが原則になっています。参加人数が読めない段階では、会場費やシンポジウムに費用をかけようと考えた場合、予算面が不安定になります。そうした意味で、県から固定的な助成金を得たことは、大会企画の決定に大きな安定化要素となりました。また、県から支援を得たことが市の後援や商工会議所の後援にもつながりました。それが県内・市内へのポスター貼り付けやビラ配布など、広報活動へもつながりました。

学会大会は本来は学術活動に重点を置いたものであることは言うまでもありません。その上で、スポーツのように学問としても学際的であり、かつ産学民連携による活動効果が重要であるような学会では、大会の機会を利用して地方に進出し、地域内各層の人々と議論する機会を持つということ、あるいは地域におけるそのような議論の場を提供することに、大きな意味があるように思います。

その結果、それが地方におけるスポーツ産業の創造や、スポーツ環境の創造、まちおこしや地域活性化につながっていけば素晴らしいことです。今回の静岡県の大会は、やや高揚感が過ぎるかもしれませんが、学会大会がまさしくそのような活動の種を蒔くことができたように感じました。これを一過性のもので終わらせないように努力し、地域のスポーツ産業知、スポーツマネジメント知の拠点として力をつけていくことが、地域の知の中核たんとする大学に居るものの使命なのではないかと思っています。

最後になりましたが、本大会の企画運営にあたりまして、静岡産業大学経営学部事務局の皆様、当日運営の戦力となった経営学部鷺崎ゼミ、元ゼミの学生諸君、当日参加して聴

講してくれた学生諸君に改めてお礼を申し上げます。大会運営面では学会事務局に残されている過去の書式一つ一つが大きな財産となっていました。また同様に残されていた過去の運営マニュアルも大変参考になりました。これらの資料は今回の資料と合わせて経営学部で蓄積されました。これは今後本学部で学会の運営をする時に、大きな財産となるものであると思います。